

一般論文

枕草子の跋文から推定した作品の基盤と成立過程における転換期

今 井 良 一^{*1}
平 元 道 雄^{*2}

An Estimate of Essence and Turning Point of Makuranosoushi

Ryoichi IMAI^{*1}
Michio HIRAMOTO^{*2}

1. はじめに

枕草子ならびに作者清少納言に関し著者らはすでに、清少納言の自然観として「春はあけぼの」考、さらに枕草子の読み方として「日本の詩歌の歴史上どう位置づけて読めるか」について工学的立場から種々検討・報告した¹⁾²⁾。本報告では、跋文について検討・報告する。

枕草子は多くの章段(300 段以上)から構成されていて、各章段には番号が付けられている³⁾。しかし、跋文に相当する章段には番号が付けられていない。また、跋文は枕草子の最後の章段になっている。

跋文に相当する章段を以下「跋文」と呼ぶ。跋文には、枕草子の執筆の動機、主な内容、成立の経緯などが説明されているので、枕草子の全体像を示す重要なかつ特別な章段である。したがって、跋文に関する研究例⁴⁾を調査した。本報で取り上げる内容に関連する研究例はあった。以上のような事情を考慮して、跋文の内容ならびに文章に対し、作品の基盤ならびに成立過程における転換期という二つの事項を推定・検討する。作品の基盤について、著者は本校の図書館だより⁵⁾に少しは説明していたが、本報でより詳しく説明する。

2. 跋文の内容から取り上げた 2 つの事項

跋文の文章は、萩谷氏³⁾によれば、以下のとおりである。

この造紙、目に見え、心に思ふことを、「人やは見むとする」と思ひて、つれづれなる里居のほどに、書き集めたるを、あいなう、人のために便なきいひ過ぐしもしつべきところどころもあれば、「よう隠し置きたり」と思ひ

しを、心よりほかにこそ、漏り出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣のたてまつりたまへりけるを、「これに、何を書かまし。主上の御前には、「史記」といふ書をなむ、書かせたまへる」など、のたまはせしを、「まくらにこそは、はべらめ」と申ししかば、「さば、得てよ」とて、賜はせたりしを、あやしきを、「こよや」「なにや」と尽きせず多かる紙を書き尽くさむとせしに、いとものおぼえぬ言ぞ多かるや。

大方、これは、世の中にをかしき言、人のめでたしなど思ふべき名を選び出でて、歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出だしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」と、譏られめ。ただ、心一つにおのずから思ふ言を、戯れに書きつけたれば、「ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をもきくべきものかは」と思ひしに、「恥づかしき」なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。

げに、そもことわり、人の憎むを「善し」といひ、褒むるをも「悪し」といふ人は、心のほどこそ推し量らるれ。ただ、人に見えけむぞ、ねたき。左中将、まだ「伊勢守」ときこえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この造紙載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ、返りたりし。それより、歩き初めたるなめり。

とぞ本に。

跋文の文章中、「この造紙～漏り出でにけれ。」をパート 、「宮の御前に～言ぞ多かるや。」をパート 、「大方～いとあやしうぞあるや。」をパート 、「げに、～歩き初めたるなめり。とぞ、本に。」をパート とする。パート ～ から次の 2 つの事項を取り上げる。

*1 久留米工業高等専門学校機械工学科

*2 久留米工業高等専門学校一般文科

Copyright 2003 久留米工業高等専門学校

事項 1 作品の基盤：

枕草子の作者、清少納言自身の思考の結果が作品内容である、すなわち、作品の基盤は作者清少納言自身の思考である。そして、そのことを明瞭に自覚している。

事項 2 成立過程における転換期：

枕草子という作品が完成・成立するには、長い成立過程が必要であった。その長い成立過程において少なくとも 1 つの転換期があった。すなわち、作品がかかれはじめた初期とその転換期後とでは作品の性格が変化する。

3. 跋文の内容から推定した 2 つの事項

2.で紹介した 2 つの事項についてそれぞれ考察する。

3.1 事項 1 作品の基盤

パート と には主として作品の内容が説明されている。

パート 中の「目に見え、心に思ふ」の意味を検討すれば、

文献 6)の「おも・ふ」：心にある思念を起す。論理的に筋道をたどって結論に至る過程をいう。「かんがふ」に対して、ひとまとまりの内容を心に抱き持つ意を表し、論理よりも情意を主とすることが多い、

著者らは：作者自身の目、耳、心、そのほかのセンサーで情報をピックアップし、心という情報

処理装置で処理した。ただし、人の行動の中には、1 つの行動であっても程度に幅・バリエーションを持つものがある。「思う」にも「軽くふっと思う」から「深刻に思う」までの幅がある、である。この検討から、作品の内容が作者の思考の結果であるといえる。

一般的に作品・行動はひとの思考の結果である。特に枕草子の多くの章段が作者の観察・経験に基づくことから、このことは容易に理解できる。人の行動・情報発信は“我考う＝思考”の結果である。このことは、古今東西共通なことであり、現代人はこのことをよく知っている。しかし、このことを意識・自覚しているかは検証する必要がある。少なくとも作者が生きた平安時代の人々はほとんど意識・自覚していなかったと思われる。一般的に当時そうであったと考えると、作者が明瞭に「この造紙、目に見え、心に思ふことを、……書き集めたるを、……」と書き残したことは当時としては珍しく、意義があると言える。特に、こう書き残したことは、枕草子は思考の結果である。さらにそのことを意識していたと解釈する。

この文章の意味することに関連し、人の行動・情報発信は思考の結果である、そしてそのことを意識していると思われる例を表に示す。これらの例は、年代の古い順にならべている。

例 1 は、古今和歌集の序文⁷⁾である。

例 1 と例 2 には作品の拠って立つ基盤が示されている。文章の構造も似ている。また、重要な単語も共通している。作者清少納言は古今和歌集の序文・全作品を熟読していたであろう。このようなことを考慮すれば、作者清少納言は、古今和歌集から大きな影響を受けた、跋文を書くに当たり古今和歌集の

表 人の行動・情報発信は思考の結果であることとその意識例(文献 3,7-10)

例	年代	人 物	思 考 の 結 果 と 意 識
1	914	紀 貫之	やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言い出だせるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いずれか歌をよまざりける。
2	1000	清少納言	この造紙、目に見え、心に思ふことを、「人やは見むとする」と思ひて、つれづれなる里居のほどに、書き集めたるを……
3	1000	紫 式部	野分たちて、にはかに膚寒き夕暮の程、つねよりも、おぼし出づること多くて、靱負の命婦といふをつかはす。
4	1330	吉田兼好	つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書つくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。
5	1630	デカルト	私は思惟する、ゆえに私は在る(Cogito, ergo sum)。

序文を参考にしたと推定する。また、奥村氏の解説⁷⁾「この一文は仮名序。撰者の一人、紀貫之が、和歌の本質、起源、技法、歴史、および『古今集』編纂の経緯等について論述したもの。以降の古典文学における序文の規範となったのみならず、評論文学の先駆としても大きな意味をもっている。」が参考になる。

例 3 において、「おぼし出づる」の主語は「帝」である。「おぼし」という行動には「思ふー考える」ことを含む。帝の実質的な正妻とその子光源氏のことを帝自身が種々考えた。その結果として、帝は二人の住む里へ命婦を派遣した。紫式部は、人の行動・情報発信は思考の結果であると意識していたでしょう。しかし、清少納言よりは意識は弱いと思う。

例 4 における「つれづれなるままに・・・」は、例 2 における「この造紙、目に見え、心に思ふことを、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを」に大変よくにている。したがって、吉田兼好は、大先輩清少納言が書き残した跋文の 1 行目～2 行目を参考にし、強い意識を持ったでしょう。そう思える事情は、清少納言は、作品の最後において自信なさそうに、一方吉田兼好は、自信を持って冒頭に述べているからです。

例 5 における「私は思惟する、ゆえに私は在る：Cogito, ergo sum」は、近代哲学の祖といわれるデカルトが 1630 年頃にはじめて述べた言葉である。意味は、自分自身の存在の確実性は「考える」ことに見出せるというものである。いいかえれば、自分自身の存在の基盤は、「考えること」にあるともいえる。1000 年頃に作者清少納言が「この草子、目に見え、心に思ふことを、……書き集めたるを、……」と述べたことと 1630 年に「Cogito ergo sum」とデカルトが述べたことを比較すれば、述べた内容には共通点がある。前者は後者より 630 年ほど前に述べたことがわかる。デカルトは、自分自身の存在の確実性は「考える」ことに見出した。このことを参考にすれば、すくなくとも次のようにいえましょう「作品の拠って立つ基盤は自分が考えたことにありと清少納言は意識していた」。さらに、「自分自身の存在の基盤もみずからが考えることにあり」と意識するようになったかもしれない。この主旨に関連し、岡田氏は文献 4) で次のように述べている。

この重い「つれづれなる」状況の中で清少納言は、「目に見え、心に思ふことを、人やは見むとする」と思ひて「書き集めたと言う。自分の目でとらえ、自分の心で思ふことを、人に見せるものとしてではなく、自分の、今

生きる証として書き集めたものだと言うのであろう。

このような岡田氏の意見に本報の主旨は大変よく似ている。哲学の特徴のひとつが、「durchdenken: 考え抜くこと文献 11)」にあるので、清少納言は、哲学者の特徴を少しは持っていたともいえる。

3.2 事項 2 成立過程における転換期

広い意味での転換期ということ考えた場合、枕草子という特定の作品にも何らかの転換期が存在するのが普通であろう。実際枕草子における転換期の例として岡田氏⁴⁾は、「長徳二年のこの長期の里居を、清少納言の枕草子執筆の姿勢の転換期としてとらえる見方は、すでに多くなされている。」と述べている。そこで、特に枕草子の跋文中パート 1 から「成立過程における転換期」とその転換期の性格を、推定・説明する。

「当初作品を世間に公表する意志があったかなかったか」は、作品の性格や成立過程を検討する上で重要なキーポイントとおもわれる。パート I での「心よりほかにこそ、漏り出でにけれ。」とパート

での「ただ、人に見えけむぞ、ねたき。」から判断すれば、著者は「なかった」と考える。パートより、中宮定子は、作者へ兄藤原伊周が自分と一条帝へ大量の紙を献上した。一条帝側の紙には「史記」が書かれるとのことである。それでは自分がもらった紙に何を書いたら良いか、作者に相談した。それに対し作者は「それはまくらでしょう」と答えた。その返答に中宮定子は、それでは貴女にこの大量の紙を渡します、そしてそれに書くよう指示した、と考えられる。

パート 1 の内容に対し萩谷氏は、「これらの記述内容は史実ではなく、興味本位の虚構的な創作であろう・・・、むしろ史実としては、第 259 段に見えた中宮下賜の料紙 20 枚に原初「枕草子」を書き始めたと見るべきか。」と解説している³⁾。259 段には、気分が優れぬときでも白い紙・上等の筆などが手に入ると気分が良くなる、作者が中宮定子から紙 20 枚をもらったことも書かれている(文献 3)。パート 1 の内容が史実であるなし(文献 3,4)にかかわらず、作品の長い成立過程においてなにか特別な時期例えば転換期があったかなかったかを考えた場合、パート 1 は、転換期があったことを強く示唆している。萩谷氏の指摘³⁾も参考にすると、とにかく作品の長い長い成立過程の途中途中において、作者に少量の紙が折にふれもたらされたのは、史実であろう。

パート と の文章から次の 1) から 4) を推定する。

- 1) 作者自身ひとつのまとまった作品にしよう
と意図して書き始めたのではない。最初は 1,2
枚の紙に・断片的にメモ程度の意味で書きの
こしていた。性質の異なる膨大な資料を集め
た,ばらばらの紙 1,2 枚に書いた資料もあった
(「書き集めたるを」と「いとものおぼえぬ言
ぞ多かるや」)。
- 2) したがって,それらを人に見せるというこ
とは意図してもしなかった。しかし,作品が
おかれたこのような 当初の状況から作者の
意に反して,いつしか,なにかのきっかけで
作品の断片断片が他人に知られ読れた(心よ
りほかにこそ,漏り出でにけれとパート 参
照)。読れた場所を X_i , 読れた日時を T_i とす
れば,多くの点(X_i, T_i), $i=1,2,3, \dots$ が
設定できる。
- 3) その結果として多くの人から散発的に作品
の評判が中宮定子の耳にも入った。作品をよ
み,作品の執筆継続を望む人々の熱意は高ま
った。中宮定子もまた,作者に執筆するよう
勧めかつ執筆しやすように環境を整えた。執
筆継続を熱望する人々は,執筆ができるよう
にと少量の紙・墨・筆などを折りにふれ随時
作者のもとにもたらした。以上のような人々
の熱意を知る以前と以降とでは作品執筆への
姿勢は大きく変わった。人々の熱意を知った
時期は作品執筆・成立のうえでひとつの大き
な転換期になった。
- 4) もの心付き始めからこの転換期までは,作
者の純粋な「目に見え,心に思ふことを」が,
一方この転換期から以降では中宮定子を中心
とする宮中でのできごとを賛美する内容が主
になった(パート)。

転換期の前後における状況を以下のように想定
した。

ある年代 T_s を境にして, T_s の前で $C1$ の場合と

$C1$ 作品を人に見せる。	・ $C1'$ 作品を人に見せる。
$C2$ 作品を人に見せない。	・ $C2'$ 作品を人に見せない。
T_s 年代 T	
図 転換期の設定(作品:作者が少女期から 書き始めたものの集合体)	

$C2$ の場合,同様に T_s の後でも $C1'$ の場合と $C2'$ の
場合を設定できる(図参照)。

そうすると年代 T が T_s の前 $\Rightarrow T_s \Rightarrow T_s$ の後へ経
過する過程において次の 4 とおりが考えられる。

$$C1 \rightarrow C1', C1 \rightarrow C2', C2 \rightarrow C1', C2 \rightarrow C2'$$

$C1 \rightarrow C1'$ の場合と $C2 \rightarrow C2'$ の場合では,作品の性
格は変化しない。変化するのは, $C1 \rightarrow C2'$ の場合と
 $C2 \rightarrow C1'$ の場合である。この意味で $T=T_s$ は,成立
過程での一つの転換期となり得る。

枕草子は第 3 の $C2 \rightarrow C1'$ の場合を経たと推定する。
 $C2 \rightarrow C1'$ の場合への移行がこの転換期の性格と考える。

「作品を人に見せる,見せない」とは「情報を公開
する,公開しない」と言うことである。人が生み
出した情報=作品が自分自身という記憶装置から
自分以外の記憶装置(例えば紙)に移ればその情報
はいずれ公開すなわち人に見られる運命である。こ
のように考えれば清少納言の作品が長い成立過程
の間に公開されるようになったのはごく自然であ
る。たまたま作品が有名になったという特殊事情が
加味された。

作品のどの章段がこの時期に書かれたのか,また
時期を特定することは著者にはできない。

作品が成立する長い過程を事実に基づいて明ら
かにするには,作者の年齢と年齢ごとに書いた文字
数の対応が必要と考える。

4. ま と め

跋文の文章と内容から 2 つの事項について種々
推定した。

枕草子は,大変謎・疑問点の多い作品である。著
者にとって謎・疑問点は,各章段の内容の日時が不明
である,さらに書かれた日時も不明である。内容
の信ぴょう性などである。したがって,著者らは
種々推定せざるをえなかった。

参 考 文 献

- 1) 今井・平元:久留米工業高等専門学校紀要,第 11 巻,
第 2 号,(1996),37。
- 2) 今井・平元:久留米工業高等専門学校紀要,第 13 巻,
第 2 号,(1998),1。
- 3) 例えば,萩谷:枕草子下,(1982),276,175,新潮社。
石田:枕草子下,(1996),367,423,角川書店。
- 4) 例えば,岡田:女子聖学院短期大学創立 30 周年記念
論文集(女子聖短紀,No.30),(1998),352。小森:日本文

- 学協会，日本文学，(1998),43。永井：学習院女子短期大学国語国文学会，国語国文論集，(1998),7。
- 5) 今井：久留米高専図書館だより，No.64，(2003),7。
- 6) 中村・ほか 2 名編：角川古語大辞典第一巻，(1982),615,634，角川書店。
- 7) 奥村：古今和歌集，(1984),11,新潮社。
- 8) 山岸：源氏物語 1，(1969),34,岩波書店。
- 9) 西尾：方丈記・徒然草，(1969),89,岩波書店。
- 10) 例えば，下中編：哲学事典，(1979),969,平凡社，ブリタニカ国際大百科事典 13,(1993),603,テービエス・ブリタニカ。広松・6 名編：岩波哲学・思想事典，(1998),1115,岩波書店。
- 11) 佐々木：実存哲学要論，(1958),7,18,関書院。

(2004 年 2 月 20 日 受理)

* ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ *